西上免遺跡（にしじょうめん）

調査の経過

西上免遺跡は一宮市今伊勢町馬寄および尾西市開明にかけてひろがる複合遺跡である。現況は標高７ｍの水田および畑地であり、弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地として県遺跡番号0701として登録されている。昨年度、初めて調査が行われ、古墳時代から鎌倉時代にかけての溝・土壙などの遺構が検出された。今年度も、1992年２～３月にかけて東海北陸自動車道建設予定地内で実施し、調査区は昨年度調査区の南側を92Ａ区、北側を92Ｂ区と設定し、計1270㎡を調査した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、耕作土層・褐色シルト層・黒褐色粘土層・黄褐色シルト層である。調査区内で確認しえた遺構は、出土遺物により４期に分けて考えることができる。主要遺構は以下のとおりである。

弥生時代中期～古墳時代初頭	溝５条
奈良時代	溝４条・土坑４基
鎌倉時代	溝６条・井戸６基・掘立柱建物２棟
室町時代	土壙31基

今回の調査において、確認できた遺構の性格を上記の時期別に概観すると、弥生時代中期から古墳時代初頭においては、溝を中心とするためその性格は不明の点が多い。しかし、調査区南に展開すると推定される弥生時代の集落との関係でまずはとらえておく必要があろう。奈良時代においては、大溝等の配置からその南に集落が拡がっていた可能性が考えられよう。また、鎌倉時代においては掘立柱建物・井戸の組み合わせにより、数カ所に屋敷地が想定される。そしておおよそ14世紀初頭には終焉し、室町時代においては方形土壙群が配置された墓域となる様子が窺える。

遺物については、南側の91Ａ区からの出土量と北側の91Ｂ区からの出土量には大きな差があり、91Ｂ区が遺跡の北端部であることが推定される。遺物の大部分は灰釉系陶器であり、その他美濃須衛産の須恵器の出土が見られた。また、石鏃が４点、研磨に用いたと思われる軽石３点、縄文晩期の土器片１点も出土している。　（太田芳巳）

91 A 区全景